

は悲しむ

同

二ツ三ツ取りのこされし柿の實の色さむげなり冬の

山畑

太田 赤童

たゞ一つ滞れたる如く光る星の君があゝの夜のまなざ

しににて

同

母の手にポタリとをちる涙見ていすまいなほす小

き妹

同

北國の空をながめて今日も又母と妹としみじみと思

ふ

同

ひぐらしの聲もかそける啼ける日を友病むと聞き涙

すわれは

同

思 出 草

前の世は兄弟ならめ此の二人あまりに奇しき運命な
るかな

今 泉 智 旭

語らひの重なる程に運命のあまりに似たる二人なる

かな

同

此の悩み此の愁だになかりせば永久に二人知らざり

しならめ

同

同じ道同じ悩みを辿り來て佛の仕ふる奇しき縁

よ

同

しづしづと生命の壺を捧げてゆく手おのゝきし若き

日のわれ

太田 赤童

低唱はうちさびしくもしみじみとわが聲ふるふ悲し

みのわく

花 島 涙 草

明 暗

必ずしも僧侶であつて呉れませよ辛棒しませとはげま
せり君

今 泉 智 旭

魔の神のいごゝ我が身を襲へども我は動かじ心やす

かれ

同

うづ高き文にうもるゝ法の子の末の望みは燈臺の

守

太田 赤童

寺平一本松のもとに來て傾きくるゝ夕日を見

る

同

曉の雲たなびける山の嶺の晴間より見ゆ眞白き美女

がれ

同

讃經のこえ波うつゝ朝堂の光影もれ來し朝のたうと

さ

江 原 白 線

樵夫は斧をおさめて歸り來む鳥はねぐらに我はこゝ

ろに

同

老ひの身に星を頂き月を踏む野山の業もわ子を思へ

ば

戸田峯仙

未せ世のわれ等をすくふ法の聲いゝど貴く我が胸を

つく

花鳥涙草

不輕品の「我深敬汝」のみこばを大地にびたり耳あ

てゝきく

同

自然の瞳

秋くれば野山の神は菊園に月はきらめく露に宿ら

ぬ

田川恵良

たをやめの黒かみときて瀧の端の白き肌へに白玉の

散る

江原白線

そよ風に散るもみち葉はいとしくも我をしいて訪

づれにけり

下田雨女

白糸の瀧端に立てる乙女子の姿尊し羽衣の

橋

太田赤童

風なげる秋の夕べを音もなく庭もせに散る會式櫻

は

同

天の川さやけくはれて七面の峯に星ふる逝く秋のそ

ら

同

冬の日に山の庵ののきの端に小さき蜘蛛の住家つく

りぬ

同

山寺

東溟

鐘聲迥出最高層青壁無梯不可登

千壑萬峯生暝色一樓有箇看雲僧

同

梵宮高出白雲層露欲爲霜月氣凝

一点燈光透疎木上方應有坐禪僧

同

隔崦清鐘一杵傳禪扉半掩夕陽天

石泉白咽僧無語雲冷山茶花落前

同

木魚石磬上方聞

尋到禪關樹竹分

端的入房先問道

老僧笑指一峯雲

送僧

楚水吳山不計程

無心端的是平生

問君錫杖歸何日

笑指行雲一片輕

行脚僧

偶爾隨緣出翠微

一瓶一錫一麻衣

白雲猶是時歸岫

三界無家何處歸